

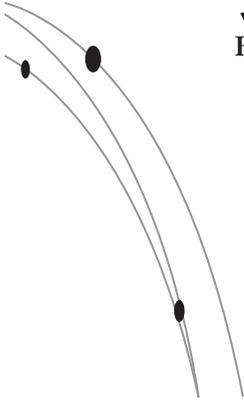
連載

## フィールド・アイ Field Eye

ヘルシンキから——③

立命館大学 麓 仁美

Yoshimi Fumoto



### 安心のかたち、信頼の重み

サバティカルを終え、日本に戻ってからしばらく経つ。振り返ると、フィンランドでの日々は、研究者として働くということだけでなく、異国で「暮らす」ということそのものを深く考える時間だった。フィンランドでの生活は、穏やかで美しく、静かな信頼に満ちていたが、その一方で、予想もしなかった戸惑いや緊張の瞬間もあった。安全と自由、個と支え合い、それらが織り合わさった日々の中で、「安心とは何か」「信頼とは何か」を問い直すことになった。

朝、まだ薄暗い空の下、3人の子どもたちがそれぞれ通学路へと歩いていく姿を見送るのが、いつもの日課だった。6歳の末っ子はさすがに送り迎えをしていたが、上の2人は、1人で学校へ通っていた。最初の頃は異国の地で子どもたちを1人で通学させることに不安があったが、それがこの国では当たり前のことだとすぐに気づいた。横断歩道に立つと、車は必ず止まり、ドライバーが「どうぞ」と合図をしてくれる。歩行者も軽く手を上げて「ありがとう」と応える。そのやりとりはごく短い、互いに相手を尊重し合う小さな礼儀を感じる。信号がなくても、ルールと信頼がそこにはある。子どもたちが1人で歩くことも大人たちが自然に受け止めている。その姿を見て、ここでは「子どもを信じること」が社会の前提になっているのだと思った。

フィンランドの安全は、上からの厳しい取り締まりではなく、社会全体に共有された「信頼」と「責任感」によって支えられている。その一方で、こうした信頼を維持するための制度的枠組みも整っている。そ

の象徴が、所得に応じて金額が変わる交通違反の罰金制度だ。某大手企業の幹部がスピード違反で日本円にして数百万円の罰金を課せられたという話も、単なる逸話ではなく、「社会の中で同じ重みをもつ罰を受ける」ことの象徴だ。公平とは結果を揃えることではなく、責任の重さを等しくすることという考え方が、人々の行動の根底に流れているように思う。

暮らしてみると、そうした信頼の文化は日常の細部にまで息づいていた。街中では、小さなロボットがスーパーの商品を届ける姿をよく見かけた。人々の間を静かに走り抜けていくその様子は、まるで社会の一員のような感じだ。通り過ぎる誰もがそれに触れようとせず、いたずらに開けたり、商品を取ったりする人もいない。無人のロボットが安心して街を走ることができるのは、人々が見えないところでも正直であることを前提としているからだ。トラムやメトロには改札はないが、時折、係員が乗り込んでチケットを確認し、購入していない人には罰金が科される（ヘルシンキ地域交通局（HSL）では100ユーロ、国鉄（VR）の場合には80～100ユーロ）。社会全体が「正直さ」を信頼の根に据えているが、その信頼を支えるための仕組みもきちんと整えられている。

冬の寒さを遮るためか、お店のドアは重いことが多い。そのため、親切にも前の人が開けて待ってくれることがあり、「Kiitos！（ありがとう！）」「Ole hyvä（どういたしまして）」というやりとりが自然に交わされる。娘もこのやりとりが大好きで、自分からドアを押さえて「Ole hyvä」と言うのが日課になっていた。小さな場面の積み重ねの中に、互いを尊重する文化が根づいているのを感じた。

子どもたちが通った学校にも、この「信頼」と「主体性」の文化が息づいていた。三者面談では、まず子ども自身が「自分は何を目標にしたいか」を決めることが求められる。教師はそれを尊重し、必要な教材や学習方法をすぐに整えてくれる。あるとき娘が「算数のもっと難しい問題を練習したい」と話すと、翌日には新しいテキストを持って帰ってきた。先生たちの裁量は大きく、子どもの意思を即座に行動で支える。教育の中心に「子どもの主体性」が置かれていることを実感した。

給食も印象的だった。ビュッフェ形式で、自分の食べたいものを自分でよそう。食べ残しが少なく、自分の判断で選ぶ経験が自然と身につく。細やかな指導よ

りも、選択と責任の練習を重ねていく仕組みだ（とはいえ、担任の先生が「野菜も少しはとってね」と声をかけることもあるそうだ）。学校という場そのものが、子どもを信じて任せる文化の延長線上にある。

一方で、フィンランドでの暮らしは「安全」だけではなかった。ある日、トラムに乗っていたときのことだ。ヘルシンキの中でもあまり治安が良くないといわれる地域で、中年の女性がマリファナと思われるものを吸いながら乗ってきた。車内に広がる独特の匂いに驚き、早めに下車した。その時だけは、普段感じていた穏やかさとは少し違う空気をまとっていた。別の日には、男性が他の乗客に対して絡み出し、周囲が緊張する場面にも遭遇した。

後で現地の友人に話すと、「そういうことも、時にはあるね」と穏やかに言われた。フィンランドは世界の幸福度ランキングで常に上位に位置するが、ドラッグの使用やメンタルヘルスの問題が社会課題になっている。冬の長い暗闇と静けさの中で、心のバランスを保つことは容易ではない。安全で穏やかな社会の裏側に、見えにくい痛みがあることを知った。

それでも、街の人々は穏やかで親切だ。困った時にも丁寧に教えてくれる。長く話し込むことはないが、助けを求めればきちんと応えてくれる。互いの領域を尊重しながらも、必要なときはつながる、その距離感が、この社会の「安全」を形作っているのだと思う。

また、アルコールの販売にも節度がある。度数の高い酒類は、国が管理する専門店「Alko」でしか購入できない。背景には、アルコール依存の問題に社会全体で向き合ってきた歴史があるという。個人の自由を認めながらも、健康や福祉を守るためのルールを共有している。この国の「信頼」は、同時に「責任」と対になっているのだ。

子どもたちが1人で通学することができるのも、この社会の文化があってこそだ。最初は心配でGPSで位置を確認していたが、次第にその必要はなくなった。先生も友人の親も地域の人々も、ゆるやかに子どもを見守っている。日本では「危険から守る」ことを前提に環境を整えるが、フィンランドでは「子どもを

信じて送り出す」ことが前提にある。その信頼の積み重ねが、子どもたちの自立を育てているように感じる。

こうして思い返すと、フィンランドでの暮らしは「安心」と「孤独」、「自由」と「責任」が静かに共存する時間だった。完璧な制度や完全な安全は存在しない。だからこそ、人と人の中にある小さな思いやりが社会を支えている。誰かの自由のそばに、誰かによる支えがある。その当たり前の構図を、この国の人々は大切にしているのだと思う。

フィンランドで暮らすということは、そうした静かな支え合いの中で、自分の感覚を少しずつ調整しながら生きることだった。美しい湖や森、穏やかな街の風景に包まれながら、信頼と不安の間にある現実を見つめ直した。そこで感じたのは、「信じる」ということの静かな強さだ。

そして、誰かを信じ、任せ、尊重するその積み重ねの中に、この国が「インクルーシブ（包摂的）」と呼ばれる理由があるのだと思った（フィンランドは、教育や福祉の分野では、誰もが支え合いの中で学び、生きる包摂的社会的代表例としてしばしば紹介される）。完璧ではない現実を前提に、人が人を排除せずに共に暮らしていく。その当たり前の姿勢に、社会の成熟とやさしさを垣間見た気がする。異国での生活は、文化や価値観の違いを体で感じながら、自分の中の「当たり前」を揺さぶる時間でもあった。何を信じ、どこまで任せるか。その境界を考えることが、信頼という言葉の重みをあらためて教えてくれた。フィンランドでの経験は、私自身の中の「包み込む力」を問い直す時間でもあった。異なる社会の中で「安心」や「信頼」がどのように形作られるのかを体感的に学んだことは、今後の研究を進める上でも貴重な示唆となった。この経験を、働き方や組織のあり方を考える上での新たな視点として活かしていきたい。

ふもと・よしみ 立命館大学食マネジメント学部教授。  
最近の論文に「職場における支援の受容がワーク・ファミリー・コンフリクトに与える影響——COVID-19の感染拡大による在宅勤務を調整変数として」『経営行動科学』Vol. 32, No. 1・2, pp. 21-37 (共著, 2022年)など。組織行動論専攻。